

戦後のお正月の思い出のこと

宇仁妙子（当時、姫路市在住 昭和 26 年生まれ）

1956 年、政府の経済白書は「もはや戦後ではない」と発表した。私の記憶に今も残る昭和の 30 年頃、ご町内は人情豊かな付き合いがあった。路地には「魚～魚～」 「青竹～」 「豆腐～」 の売声が響いていた。新年あけて、一月二日、父や母は「女正月」と言っていた。その日は朝から、母は包丁を持たず、台所に立つのは父だった。二日の朝は父の作るお雑煮である。客間に緋毛せんを敷き、来客の用意。10 時頃から賑やかな声と共に、ご近所のおばさんたちが 7～8 名、着物姿で晴れやかなお顔。口々に新年の挨拶。一同集まってから始まる「百人一首」大会。その賑やかで楽しそうなこと！

私たち子どもは表の路地で羽子板や独楽回しをして遊び、縁側の窓からそっと母親の様子を覗いていた。私にとって、忘れられない正月風景である。